三重県答志島地域での子育てと社会的な親としての寝屋親制度

研修場所：三重県答志島

研修期間：3 日間

参加人数：3 人

【答志島について】
今回の研修で訪れた三重県答志島は、答志、答志和具、桃取の 3 集落がある鳥羽市最大の島である。令和 4 年 2 月時点で人口 1,861 人。鳥羽港から 1 日に 8〜10 便の定期船が通っており、漁業と観光業を中心産業としている。細くて入り組んだ道が目立つ漁村で、道が細いからか島民の皆さんがバイクに乗って移動している姿を多く見かけたのが印象的であった。インタビューの中で聞いた島民の方から見たこの島の魅力としては、人と人の距離が近いこと、島民同士が助け合えること、そして子供が子供らしく自由にのびのび過ごせることなど。また、観光客にとっては、自然の多いところや信号が設置されていない光景などの離島ならではの非日常を感じられるところなどではないかということであった。

【答志島温泉くつろぎの宿美さきについて】
研修中には答志島温泉くつろぎの宿美さきに、本来は一泊 10,000 円ほどの宿泊費がかかるところを、先方のご厚意で、朝夕のお手伝いをすることにより無料で泊めていただいた。この旅館は 50 年以上前に始められてから、3 代にわたって橋本さん一家がご家族で経営されている。若旦那の橋本崇さんによると、元々は水産加工業を営んでおり、そのオフシーズンに民宿を始めたところから観光業にかじを切り、今の場所に旅館を開くに至ったそうだ。お客さんが本土との違いを感じられる体験を提供することにこだわっており、漁港が近く全ての客室から漁港の風景が望める点や、手ぶらで行うことのできる魚釣り体験などがこの宿ならではの魅力だという。

【寝屋子制度とは】
今回の研修では、寝屋子制度に主軸を置いて調査を行った。この寝屋子制度とは、中学校を卒業した男子が、寝屋子として寝屋親とされた人の家に 4 〜 7 人ほどの集団で寝泊まりをする制度である。寝屋親は、その年に寝屋子となる子供の親たちが話し合い、安心して預けることができるとした人に依頼する形で決まる。これは結婚をして家庭を持つまで続く。かつて男子は中学校を卒業すると皆が島で漁師となったため、この寝屋子で漁師としての仕事を学ぶという側面もあったそうだ。漁師となる人が減ってからも、長男をはじめとして島に残って家業を継ぐ人を中心に寝屋子に入っていたようである。起源ははっきりしていないが、江戸時代から続いているとされており、元々は伊勢志摩地方の各地で見られた制度であったが、現在も制度が残っているのは日本で答志島だけだといわれている。

【島民の皆さんにとっての寝屋子制度】

研修においては、島民の皆さんへのインタビューを行い、寝屋子制度に関する聞き取り調査を行った。全体として寝屋子制度に対してよい文化であるというお話が多くかった。具体的に挙げられていた寝屋子制度の利点としては、寝屋子兄弟や寝屋親との一生続く関係を得られる点である。寝屋子兄弟は友達以上兄弟未満の関係性で、このような関係を答志島では朋輩と呼び、朋輩の関係性でつながった同年代の集まりを朋友会と呼ぶそうだ。冠婚葬祭があると全て出席をし、親戚のように運営の手伝いをするなど、何かあれば駆けつけてくれる心強い存在だという。寝屋子を解散した後にも、定期的に集まり酒を飲みかわしながら近況報告をする時間は楽しいのだと話していた。寝屋親との関係については、親では言ってくれないことを言ってくれたり、自分自身も親には言えない事でも相談できたりする存在であるという。実の親よりも寝屋親のほうが怖いというような声も聞いた。また、寝屋親は自分の寝屋子の結婚に際して全員の仲人を務めるそう。このような寝屋子兄弟や寝屋親との関係性を築ける点は寝屋子制度ならではだと感じた。家族ではないが、家族に近い存在というのはなかなか珍しい関係性だと思う。家族だからこそ相談できない悩みも生じる中で、友達以上の関係にある同年代や親以外の頼れる大人の存在があることはとても心強いのではないだろうか。

【寝屋子制度の現状】
制度が残っているのは日本で答志島だけであるということであったが、今でも寝屋子が残っている地域は答志島の中でも答志だけであるようだ。和具においても調査を行ったが、この地域ではすでに寝屋子制度は廃れてしまっている。原因としては、子供の減少である。寝屋子となる子供がいなくなってしまったことで和具にはもう寝屋子が存在しないという。また、いまだ制度の残っている答志においても子供の減少により寝屋子が減っており、同学年ではなく前後の学年と共同での寝屋子が作られているそうだ。このように寝屋子制度自体は少子化によって失われつつあるが、友達以上兄弟未満である朋輩・朋友会の関係性は今も残っているという。寝屋子の関係でなくとも子供の少ない離島という環境で同年代の強いつながりができているようだ。また、寝屋親とはならないものの地域で子育てをするような意識は今でも強いようで、島の子供が減り「子供は島の宝」という意識がより高まる中で、島全体で子育てをする雰囲気は強まっているように感じるというお話だった。

【ねやこや】
今回の調査の主軸である寝屋子制度とは直接の関連はないが、ねやこやという地域おこし協力隊の答志島での活動についてもお話を伺った。このねやこやという場所は海洋教育の拠点であり島民の皆さんが集まる憩いの場として 2022 年から運営されている。カフェを改装した室内にはテーブルと椅子が設置されており、島民の皆さんが集まれるよ

うになっている。2階には島の方々が寄付したおもちゃや本、漫画などが置かれている部屋があり、島の子供たちが遊んでいる様子をみることができた。この場所では、定期的にコミュニティカフェや映画の鑑賞会などの企画も行われている。また、ちょうど研修を行った時期には、鳥羽市の離島で活動を行っている横浜国立大学の島プロジェクトの方々を中心とした大学生の夏合宿が行われており、その方々にもねやこやにおいてお話を伺った。答志島でのプロジェクト自体は今年で5年目となり、このお盆の夏合宿は去年から行われているそうだ。ねやこやの2階を借りて寝泊まりをし、活動をしているそうで、島のイベント準備の手伝いをするなど地域の方々と関わりながら、島を盛り上げる活動をされていた。この活動を通して、地域とのつながりだけでなく参加する大学生同士のつながりも生まれているというお話だった。このように外部から人が来ることによって、島の活性化だけでなく魅力の再発見にもつながると島民の方が離されていた。

【まとめ】

今回答志島での調査を行い、当初目的としていた寝屋子制度のことだけでなく、そこから発する答志島ならではのコミュニティについて学ぶことができた。子供の減少により寝屋子制度が失われて行っている中でも、朋輩や朋友会といった同年代との関係性や島全体で子育てをしていく風土が残っているというのが印象に残っている。このように寝屋子制度が廃れていく中でもそこに端を発すると思われる地域のつながりが失われていない背景には、寝屋子制度が島民に受け入れられなくなっていったことによってなくなっているわけではないという点があるように感じる。インタビューをする中で皆さんが口をそろえて寝屋子はあったほうが良いというお話をされており、あくまで対象となる子供が寝屋子を作れる人数いないだけという様子だった。このように寝屋子制度によってできるつながりが否定されたわけではなくむしろ大切にされていることから、島民同士の強いつながりが保たれているのだと感じる。地域のつながりが薄れている都市部をはじめとした地域からすると、寝屋子制度があることよる島民の方々のつながりには魅力的なものがある。しかし、離島という狭いコミュニティの中だからこそ実現可能な部分も多く、都市部において同じように行うことはまず不可能であるとも思った。答志島の地域コミュニティに学びつつもその地域にあった方策を考えていくことが大切だとも考えさせられた。